「さあ、行こう。これからや。」と健ちゃんは
高田はんの手を引っぱった。

「健ちゃん、おおきになあ。
お姉ちゃん、おじさんによろしゅうなあ。」
と言って、僕は、二人が三条大橋を渡るのを見送った。
健ちゃんは僕にいろいろおごってくれた。
家で、肉うどん、
宝ケ池で、クラッカー、
スケート代にタクシー代、
三条京阪では、天ぷらうどん、
それに、こずかい、三百円、
合計したら、ざっと千円以上なるじゃろう、
そんなにおごってくれた。
僕は、健ちゃんのその気持ちがうれしかった。
ひさしぶりに、健ちゃんと遊んで楽しかった。
大変、楽しい時間だった。
家に帰ると八時。
健ちゃんとこ行って、おごってもらった事を話すと、
「健ちゃんは、本当にええ人や。体はもうええのかあ？」と言って
おばあちゃんとお母ちゃんは、ものすご、喜んでくれた。
すぐ、部屋に戻り、床に入った。
高田はんが僕を見る目を思い出した。
「女って、鋭いなあ」と思った。

84 女って、鋭いなあ・・・・・・・・・・・・・・ 370

萩原良昭